

文化高知 33

知性で開く高知の未来

西山 俊彦

論語に「現在の果を知らんと欲すれば過去の因を見よ、未来の果を知らんと欲すれば現在の因を見よ」ということばがある。

高知市の発展の足取りをみると、まず高知には豊富な電力があった。それを利用して、中央及び地元の資本が、当時の近代技術を導入して高知港周辺に工業を設立した。良い港があり、労働力も豊富で、土地も余裕があった。でも今はどうか。電気は少し割高であっても、ある。港は現在の経済ベースには狭過ぎる。故に高知新港の開港が一日も速く望まれている。技術は大幅に立ち遅れている。労働力はどうか。いまや企業は、頭数の時代は終わり、何ができるといふ人のみを望んでおる。土地は、もう工業に適するような状況にはない。

これだけの大きな変化がこの三十年間位の間に起こっている。その因は何か。先見性に欠けた結果ではないか。今から百年前の高知は、人材の宝庫であった。今日では昔日の面影すら無い。そればかりか、現在のわれわれの

状況をみるに、衣食足りて礼節を知るを通り越し、不遜になっている。その原因は宗教心の低下、道徳や倫理感の頹廃にあると思われる。

「一年の計は穀を蒔くにあり、十年



島野大作

の計は木を植えるにあり、百年の計は人を育てるにあり」という。今の高知に必要なのは、百年の大計、即ち高度な教育である。

高知に工業大学設置をという声が、今まで各界各層の人々の共通した意識として潜在していたのが、昨秋、爆発的に統一された意見として、世に訴えられることとなった。

中には、高知に工業大学を作っても高知へ残って勤めてくれる者はいないという方もおられる。しかし、何千分の一の確率に賭けている、鮭の人工孵化に一生懸命取り組んでいる方もいる。遅れたというよりは取り残された状況になっている高知について、百年の大計は人を育てるに如かずと思う。

高知へ赴任する技術者、医師、大学の先生達は、子供の、特に小・中学校の教育について大きな不安と不信を持っているという。でも心配は無用、高知ほど民間の塾の強い所はない。要はやる気であり、実行あるのみである。

カリフォルニアの岸を打つ太平洋、背中にはそそり立つ四国山脈、その間を流れる数々の清流、これだけ恵まれた自然美多い土佐、そこで養われ育まれた素晴らしい感性、それに高い知性が加われば、土佐人は、世界のどこでも自信を持って活躍できる。高知の未来を切り開くのは高い知性と豊かな感性である。

(宇治電化学工業株式会社代表取締役社長・工業大学をつくる会会長)

甦えらせよう！浦戸湾

松本 俊夫

——「ウランド伝説」をプロデュースして——

どういう縁か高知市制百周年記念のイベント『ウランド伝説』の脚本・演出を引受けることになり、この一年間にたびたび高知を訪れる機会に恵まれた。本来『ウランド伝説』は浦戸湾の海と空を借景とした野外舞台のイメージで考えてきたわけだが、周知のように台風のおかげでその構想を断念しなければならなかったことは、かえすがえすも残念でない。

それにしても台風に襲われたあの八月二十六日の二日前、通しリハール直前に目撃した浦戸湾の日没の風景は見事なものだった。宇津野山の峰に夕陽が沈み、朱色に映えた浦戸湾の海に玉島がシルエットで浮かんだ光景は、それから四カ月を経た

いまでも鮮やかに脳に焼きついている。浦戸湾は五台山や浦戸大橋から広く眺望するのもいいし、湾岸の周囲をぐるっと散策するのもいい。私は有名な播磨屋橋をはじめ高知市街地はそれほど気に入った所がなかったが、浦戸湾は機会があったらもう一度来て、吸江寺や雪隠寺をはじめ土

佐の表玄関としての歴史的な面影を残す数多くの史跡をじっくり見学してまわりたい。ほかに安岡章太郎の「海辺の光景」の舞台になった精華園や若宮八幡宮の「どろんこ祭」など、見たいものはまだいろいろある。浦戸湾は紀貫之が「土佐日記」を書いた頃は湾内に田辺島や葛島などの島々が点在しており、東は大津、西は小津の付近まで海が入りこんでいたという。それから千年あまりの間に鏡川、国分川、久万川などの流砂によって北湾がしだいに狭められ、現在のようになじみのある形になったとある本で読んだ。

思えば長い年月をかけて、地形すらが変わり、さまざまな歴史が流れ、人々の暮らしも大幅に変化してきたわけだが、ここ浦戸湾が高知にとっていつの時代でも交通と漁業の中心地となつて、人々の生活に深く関わってきたことは否定できない。高知は明らかに浦戸湾あつての高知だったのである。

その浦戸湾が、いま湾にそそぐ幾多の河川の流砂ならぬ生活排水によってひどく汚染されているという。

浦戸湾の美しい光景を見ただけではすぐには気が付かないが、その話を聞いたときは私もさすがにショックを受けた。むろん河川や海の汚染は日本全土に及んでいるが、ここでも同じだったのかという複雑な感慨に襲われたこともかくすことができない。

浦戸湾の海が死にかけている。近代人は目先の便利さを求めて、ひたすら自然を征服し、技術文明の名のもとに自然を消費しつくしてきた。

しかし自然が荒廃したところに人間の真に豊かな未来が築かれるはずがない。あと十年もすれば二十一世紀がやってくるといふとき、いまの大人たちは二十一世紀を生きる子供らに、瀕死にあえぐ浦戸湾を残しているのだろうか。

言うなれば私を『ウランド伝説』の制作へと駆り立てた動機とテーマはそのようなものだったと言つてもよい。ウランドという架空の巨魚の名前は浦戸をもじつてつくつたものだが、その意味で少年幸男に海からの会話が奪われていることを訴えたウランドは浦戸湾の化身でもあり、

「土佐人やもの！」

くさか 里樹



何故まんがをかくのか？そこに原稿用紙があるからだーこうなると芸術家で、私の場合どうも違う。

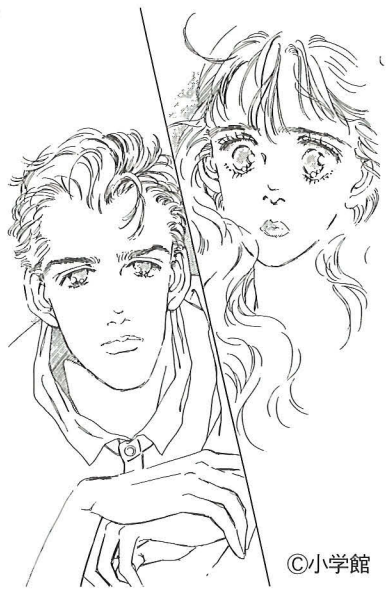
何故まんがをかくのか？生活がかかっているからだーウン、銭（ゼニ）カネの魅力は大！でも、それならまんがでなくてもいい。ウン……

何故まんがをかくのか？そこに人間関係が三度のごはんより好きである。わずらわしければわずらわしい程いい。家を一步出れば、そこはもう対人関係の渦。情容赦なく己の醜さや力の無さを知らされる。反対に極上の喜びも味わえる。そして人間としてイヤという程鍛え上げられるように思う。

人間くさい人間を無性にかきたくなる。青二才の私には青二才のまんがしかかけないが、ただいまこの時の自分自身が、結晶となつて、ひとつの作品が生まれる。スピンのスッポンボンになつて、



おや！では、これは土佐人の気質にはびつたしでは



©小学館

ないか？ということ、もしや、どこにも類の無い、独特の「文化王国」が築けるのでは……？

高知は文化水準が低いなどと言われて、お仕着せの文化の真似事してもつまらない！我流を持っていて個性を好む土佐人には、馴染まない。さて、どうしたものか。私に何ができるでもないが、何やら、ワクワク、ムズムズ。

今はまだ、三十万県民は眠れる獅子だが、「熱き土佐」、「自然王国」エトセトラ、エトセトラ、土佐の明日に胸がふくらむ。

私も「漫画王国」の一員として、微力ながら奮闘したいな、と、まだまだきれいな土佐の空気を胸いっぱい吸いながら考える昨今である。（マンガ家・香美郡土佐山田町在住）



少年幸男が魔物を退治して魚たちに奪われた声をとりのどすという寓話には、浦戸湾を甦えらせて再び海と人々の豊かな関係を回復させようという願いがこめられている。この一年は沢山の市で市制百周年の記念行事が催されたが、このように今後百年のヴィジョンをテーマにイベントをやつた例をほかには知らない。再演までこぎつけたことも含めて、私は高知市の先進性とその情熱には大いに共感した。そこには多分に高知市民の伝統的な気質が働いていたことだろう。願わくばハレからの生活に移行したところで、熱しやすく冷めやすいといったことにならないようにと、心から祈つてやまない。

（京都芸術短期大学教授「ウランド伝説」脚本・演出担当）

現代文化の不思議な部分

現代文化と伝統文化の葛藤

小松 和彦

霊界を見たがる子供達

私は「現代社会に闇が無くなって来た」ということを十年位前から言い続けてきている。

昨年八月、連続幼児殺人事件がマスコミを賑わせていた頃、小・中学生の女の子達による自殺未遂事件が徳島で起きた。「生と死のぎりぎりまで行けば、あの世を見ることが出来る」と睡眠薬を大量に飲み、病院に運ばれたという事件である。どこまで本気でどこまで遊びであったのか分からないが、現場には、その行為を示唆する「シーケンス」というマンガ本が置かれていた。

このような前世と今生、オカルトなどに関心を寄せる現象は、この少女達に限らず現代の子ども達には大変なブームになっている。

私は小学生の頃、函館に住んでいたが、近くにあった洞窟が恐い異空間として強く印象に残っている。そ

こから魔物が出てきて自分をさらって行くような、過去の世界に引きずりこまれてしまうような、そういう場所が昔は身近に一つ二つはあった。

「生と死の間を彷徨えば異界が見える」という話も、私達の世代では多くの人が年長者から聞いた経験を持つ。「病院で夢うつつの中で歩いて行くとオーイオーイと人が呼んでいる、行きたいけれど息子や家族の者と別れるのは嫌だから後ろ髪を引かれる思いで戻って来た、そしてだんだん声がしてふと気が付くと蘇っていた」という体験を持った人が、周りにいたものである。

私達の時代には、このように死とか他界であるとかいうものに、長い時間の中で、折に触れ、覚え、そして身に付けていく一定の伝承の作法があった。しかし現代ではあらゆる危険なもの、恐いものを安全という名の下に奪い取っている。今の子供達は、塾とか学校とか、大人が監視

し管理する囲いこまれた時間の中で生活している。ましてや、闇などというものはあまり体験したことが無い。山からお化けが出て来るとか鬼が出て来るとかを学ばずに育ったのだ。

そんな子供達が、今、必死になつて欲しがっているもの、それが来世とか霊、夢、恐怖、オカルトというような言葉で表現される闇の世界である。しかもそれらの作り物をテレビなどのメディアから受け取り、信じようと、時には行動を起こすという事態が今、起きてきている。他界とか、死とかに接する仕方を知らずに、手続きを抜きにして、子供達は霊界と接触しようとする。だから、ぱつと睡眠薬を飲めば前世がのぞけるんだというふうなものになつてしまふのである。

昔は闇があった

では、いつ頃から闇というものが無くなって来たか。近代文明が入って来て徐々に徐々に失われてきたと言えようが、その最も転換になった時期は、大正時代である。
大正から昭和にかけて東京行進曲というのが出て、銀座の明るいネオンであるとか、都市計画でつくられた町並み、明るい歌声というものがもてはやされた。

その頃、谷崎潤一郎が「陰翳礼讃」

死というものを見つめる、そういう体験を失ってきた。
特に関心なのはこの闇が失われて行っている時代に、更に光を強調し他界を商売にするかのような現象が今、目立ってきていることである。
あるコミック誌に掲載された「スプリンター」や「アマテラス」というマンガでは霊界からの光が強調されているし、最近では丹波練金術とされる程、丹波哲郎の本や彼の作った「大霊界」という映画のビデオが物凄く売れている。

異界を売る現代社会

健全な家庭は、親と子が深い愛情によって結ばれている。中でも母の愛情は、乳房を含ませながら、一つの生命に宿った魂に呼びかけ、語りかけ、人間としての魂を呼び覚ます営みがある。これは一朝一夕に培われるものではなく、時々刻々の積み重ねである。

観察の二年を過ぎて少年の立ち直る兆し職定まりぬ

親が変われば子供も変わる。幼い時から人の痛みのわかる人間に、人の命の尊さを知る人間に育てるには、まず「親子の対話から」と言いたい。夜のひととき一日二十分親子の対話を……。

（主婦）

私達が失った闇、それは私達の祖先が長い時間をかけて積み上げて来た伝統文化ということもできる。実世界の闇を失った子供達が、メディアによって作りものの闇を提供され、それを受け入れるのを見ると、闇を捨てたことの幸せとともに不幸を思う。私達の文化が一面で貧困化しているのだ。

現代文化というのは、実は伝統を現代風に作り替えることでもある。私達は長い伝統の文化をできるだけ伝えつつ、個性のある現代都市文化を作っていくなくてはいけないと痛感する。（文化セミナーの講演から）

秘的であるべき神社まで、奥の森を削って駐車場を作り、境内の中に結婚式場を設けたりで世俗が入り組んで悲しいまでの惨状を呈している。
大正の頃から葬儀屋が出て来る。死ぬのも病院の中できれいに服を着せられ、消毒され、多くは忙しさのために臨終に立ち会うこともできない、そういう死というものになってきている。死が見えなくなる。汚いものが見えなくなる。
最近、都市論を研究する人の中にも『近代都市計画に則った都市というものが如何に人間に住み辛いか』との反省が提起されているが、近代

平成二年の新春は、いよいよ二十一世紀への夜明けを迎えた感じがする。今年こそは暴力のない、住みよい町づくり、心の通い合う健全な人づくりの実現に努力しなくてはと心を新たにす。

保護司になって五年、主に少年の非行犯罪について保護観察を行ってきた。そこで思ふことは、非行原因のほとんどは、その家庭に問題が山積されているという事実である。子供を責めるより先に親自身に厳しい反省が求められよう。親が、大人が変わらなければ、子供達の立ち直りは期待できないのではないだろうか。
今を貫く千古の昔、万葉の歌人であり、行政府の高官であった山上憶良は（しろうがねも黄金も玉もな）にせむにまされる宝子に

親が子を思う

心は、昔も今も不変である。子があるから父とも母とも呼ばれ、親という身分が与えられる。子がない人を親とは呼ばない。不幸にして非行に走り、反社会的行為を繰り返す子供の多くは、家はあっても家庭がない。親としての責任が果たされていない。
子供は「親が言うようには育たないが、親がするように育つ」と言われるように、子供は親のなすこと、大人のなすことを五感を通して感じ取っているものである。子供にとって一番信頼される存在は母親ではなく、母と父とが最近の風潮は、母というよりも父でありたい親を増加させる傾向にあり、子供を厄介視する傾向の親もいる。

親子の対話を

片岡 イセオ

— 5 —

ナマステ・ネパール3

テングアゲハとヒマラヤムカシトンボ 浜田 康

四月も半ばになると、カトマンズ盆地も急激に気温が高くなって、飛び交う蝶やトンボの姿も日増しに多くなる。時々植物調査のために周辺の山に出掛けるとそのたびに、新しく発生した種類が現れてきて、私の目を楽ませてくれる。この頃から私は休日は全て昆虫採集に費やすことにした。

ネパールの面積は約一六万km²で、わが国の面積の約四〇%位であるが、熱帯から寒帯迄の気候が存在するので、そこに生息する蝶やトンボの種類も非常に多い。花綵列島と言われる日本も蝶の種類は多く二百種余りの生息が知られているが、ネパールにはその三倍の六百種余りが生息することが知られている。トンボはまだ十分に生息数が知られていないが、今度、私が採集した感じではこれも日本よりは大部分多いようである。この中から日本と特に関係の深いもの

を選ぶとすれば、蝶ではテングアゲハでトンボではヒマラヤムカシトンボであろう。

テングアゲハとは、頭部が天狗の鼻の様に突出していることから付けられた名前、羽は緑と黄色と黒にモザイク調に彩られた美しい蝶である。インド・ネパール・ビルマなど広く分布して、美しさと珍しさで世界的に有名である。しかも、長い間生息が全く不明で、世界の蝶愛好家から注目、研究されていたが依然としてその生息が判らず、より一層この蝶を有名にした。ところが一九八七年に、わが国の有名な蝶愛好家五十嵐邁氏が二十年の歳月を掛けて生息を明らかにして世界の脚光を浴びた。これらの地域に採集に訪れた人々は一頭はネットに入りたいと願う蝶であるが中々そのチャンスは訪れずに敗退する。

私はカトマンズ盆地の周辺からな

ん箇所かこの蝶の生息する場所を選び、盆地の南にあるブル

チヨキ・二七六二Mの頂上に行くことに決め、五月九日の朝七時に山頂に立った。

アゲハの仲間は朝気温の上昇と同時に山頂に飛んでくる習性がある。青く晴れ渡った空には一点の雲もなく、北には白く雪を被ったヒマラヤの連山が遠く眺められ、南は幾重にも重なった山々の向こうは遙かにインド平原に連なるのである。白く霞んでいる。

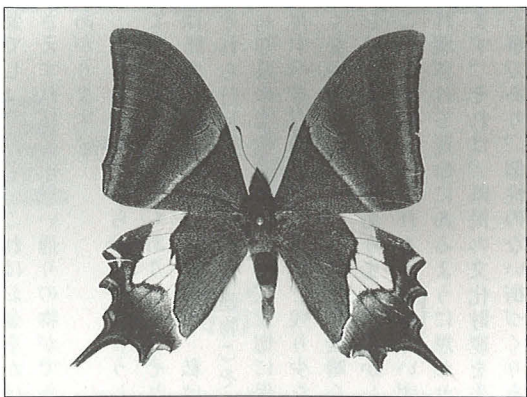
私はネットを握り締め、雲一つ無い青空を見上げて蝶の飛来を待った。八時前になってインド側からヒマラヤに向かって緩やかに吹く風に逆らって遙か彼方から黒い点が現われた。その黒点は右に左にと大きく旋回しながら頭の上に近づいてきた。紛



ブルチヨキ山頂に立つ筆者

れもなくテングアゲハの大きな雌である。山頂迄来ると風に乗って空高く緩やかに輪を描く様に飛ぶが決して下に降りてくることなく、しばらく飛んでは風流されて飛び去る。何回か飛んで来たが、高く飛びネットに入れるチャンスは無かった。この蝶の雌には細く長い尾が四本有り、その尾を風になびかせながら飛ぶ姿は、私の目にはまさに天女の舞のごとくに感じられた。雄は早く飛ぶが低く飛び、時々枝の先、石の上などに止まるので数頭採集することができた。この蝶を採集にきた多く

の人たちが手ぶらで帰り悔しい思いをするのから見れば満足すべきであるが、私の脳裏には空高く飛ぶ雌の姿が焼き付いていまだに離れない。



五月半ばになると乾期も終りに近づき、時々雨が降り始める。私の是非採りたいと思っているヒマラヤムカシトンボの発生期の到来である。

このトンボは、一九一八年六月にヒマラヤ地方で採集された正体不明の蜻蛉幼虫により英国の蜻蛉学者チルヤードが、ヒマラヤムカシトンボと名付けた。ムカシトンボの仲間には世界では、日本とヒマラヤにしか生息しない。日本のムカシトンボは一八八九年セリスにより命名されており、日本各地の溪流に生息し春先に

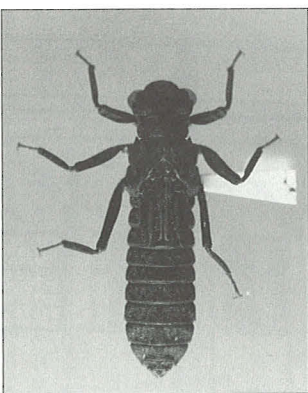
は成虫が見られる。

ヒマラヤのムカシトンボは、一九六三年に日本の学術調査隊がネパール東部で成虫を採集するまで五十年近く成虫は不明であった。その後カトマンズ盆地の北シパブリにも生息することが大阪博物館の調査でも明らかになったが、私はこの両方の中間点で新たな棲息地を発見したいと思った。もし中間点で採ればヒマラヤ地方に広く分布することが証明されることになる。

五月一七日、両方の中間地点にあたるカトマンズ盆地の東方二百軒位の山中に調査に出かけた。この蜻蛉が生息するのは二千五百米位の標高以上の所である。ヒマラヤの山は大きく、一つの尾根を越えるには五、六百米位の高低差を歩いて越えるのは普通である。しかも幼虫は水のきれいな河川の源流にしか生息しない。薪のために木を切られた山は禿げ山で土砂が流れて谷は汚れている。中々適当な谷には巡り合わない。

雨の降り始めた山中にはヤマビルが多く、地面の上の所にいて少し油断をするとすぐに血を吸われる。また谷ぞいの湿地にはトラの足跡も残されていて薄気味が悪い。こんなことに気を取られながら山を歩きやると条件の良さそうな谷を見付けた。日本であれば間違いなくムカシト

ンボの幼虫が住んでいそうな溪流である。冷たい水の中に入り、日本から持って行ったサランの水網を川しにも敷き込んでおき、一つ一つ川底の石をはぐり、もしヤゴがいれば下手の網の中に流し込んだ砂やごみの中からヤゴを探した。何回か同じことをくり返して探すうちにやっと一匹の小さなヤゴを見つけた。それはまさしく日本のムカシトンボのヤゴと同じ形をしたヤゴである。私は寒さを忘れてなお付近の水の中を探して数匹のヤゴを探ることが出来た。



これで生息は確認できた訳であるが、次は成虫の採集である。水から上りネットを手にじっと谷の上を目を懲らして待っているとそれらしきトンボが物凄い早さで目の前を通り過ぎて行く。然し射程内には入って呉れない。一時間程チャンスを持つ



ていたが、遂にチャンスは到来せず代わりに下から白い雲が駆け昇ってきて山をすっぽり覆った。と思う間もなく物凄い雷鳴が山全体に轟き渡り始めた。成虫は採れなかったがヤゴを採ることで分布を確認できたので満足して山を降りた。

これで私のネパールの話は終わります。

ナマステ。(高知県紙業試験場専門研究員)

(注)ナマステとは、コンニチワ、サヨナラ、等
人との出会い、別れの時に使う日常語。

由緒ある建物をのこそう

泉 真弓

「国民休暇県」を打ち出した高知県にとって、大切にしなければならぬ建物とは何か、考えてみました。近代的な設備を誇る大きな施設も必要でしょう。が、これはお金をかけさえすれば必ず思い通りの物ができあがります。

でもお金をいくらかけてもどうしてもできない建物もあります。それは歴史を持った古い建物です。私はそれら付加価値を持った建物こそ、高知県の文化財産として、大切に保存すべきだと思うのです。残り少なくなつたとはいえ、県内には素晴らしい、古い建物があります。しかしこのままいくとどれも例外なくいずれ壊される運命にあるように思われます。それは、県民の文化財産を失う事であり、個性のない街づくりを推進する事でもあります。個性のない街は旅人をわくわくさせる街にはなりえないのです。なぜなら旅の楽しみの一つにはその土地の生きた文

化、歴史を身近に実感する事にあるからです。

今、私は高知県立小津高校の校舎を保存して欲しいという、とても人間的でありながらとても難しい問題に遭遇しています。多くの県民の方が保存を望んでいるにもかかわらず、なぜ難しいかというところ、それはこの件に限らず、行政は新しい物を造る事には意欲的でもお金をかけてま

で古い物を保存する事に価値を見ようとしていないからです。約六十年間、高知で生き続けてきたこの小津高校は、もうすでに小津高関係者だけのものではなく、県民みんなの文化財産なのです。一部の卒業生やPTA、学校側だけの話し合いで、全面改築しようとしている事に疑問を感じます。



材を育み、激動の昭和をたくましく生きぬいてきた「昭和の生き証人」でもある訳ですから、高知県の、日本の財産として考えるべき建築物ではないでしょうか。

現代の技術で補強すれば、百年、二百年と保存が可能でありながら、なぜ、今、壊す必要があるのでしょうか。この調子でいけば、今から五十年、百年先の高知の街には、歴史を語れる古い建物は何一つ残っていないのではないかと本当に心配になります。私達には昔の人が残してくれた財産を未来へ引き継ぐ義務があ

るはずですが。

莫大なお金をかけてこの貴重な建物を消す必要はないでしょう。学校という文化を伝えるべき教育の場だからこそ保存すべきなのです。

本来、日本人は物にも心があると信じ、物を大切にしてきました。使い捨て時代の今、物を大切にすることが実感できなくなった子供達に、賢い大人達は、この古い建物を守り、文化を、歴史を語り継ぐ必要があるのではないのでしょうか。

（デザイナー・小津高）
（校舎を守る会事務局長）

童謡の里づくり

岡宗 利明



今、全国的な童謡ブームといわれています。

それは、急速な時代変化のなかで、ややもすれば見失い勝ちな人間らしさ、優しさといったものを取り戻そうとする心の表れではないでしょうか。

安芸市が童謡の里づくりに取り組むようになったのは、十一年前の昭和五十三年のこと。「春よ来い」や「浜千鳥」など数々の童謡の名曲を生み出した作曲家・弘田龍太郎の生地として、彼の偉業を後世に伝えるとともに、憩いとやすらぎのあるふるさとづくりを目指して、夕日の映える大山岬に「浜千鳥」の曲碑を建立したのが、その始まりでした。

以後、「雨」「お山のお猿」「雀の学校」「叱られて」などの童謡歌詞を刻んだユニークな曲碑が市内の公園、史跡名所に建てられ、訪れる人へのほのぼのとした詩情を語り伝えていきます。

そして、昭和六十三年、曲碑建立事業の発展的継承を願い、総合的な童謡の里づくりを図るため、有識者、音楽関係者ら十五名の委員による「童謡の里づくりを進める会」が、

発足。その最初の事業として、昭和六十三年十一月三日、NHKとの共催のもとに市民会館に歌手のダーク・ダックスらを招いて「第一回安芸童謡フェスティバル」を開催しました。この席上、市民を対象に募集した童謡作詞コンクール「弘田龍太郎ふるさと賞」の発表も行われ、「野良時計の歌」「かあさんの手」の二曲が新しい安芸の童謡として生まれました。このフェスティバルは、元年十一月二十六日に第二回が開催され、市民だけでなく広く人々に親しまれるイベントとして育っています。

また、元年四月には、童謡が縁で、「赤とんぼ」の作詞者・三木露風の出身地である兵庫県竜野市と姉妹都市提携が結ばれ、合唱団がお互いに両市のイベントに参加するなど市民の交流が始まっています。



して、童謡の里づくりの中核施設として、市民が自然にふれあいながら童謡に親しめる「童謡の里公園」を内原野地区の丘陵地約十ヘクタールに計画中で、龍太郎記念館や童謡広場、野外ステージなどの施設整備を、龍太郎生誕百周年に当たる平成四年の完成を目指して取り組みが進められています。

環境破壊や急速な都市化が進むなかで、ふるさとの創生が全国津々浦々で声高に叫ばれています。しかし、いたずらに急ぐことなく、地域の歴史、風土に根ざした着実な活動を基本としながら、この童謡の里づくりにより、地域住民の相互信頼によるコミュニティの形成や、だれにも開かれた明るい郷土づくりを目指して、一層その推進に努めていきたいと考えています。

（安芸市企画財政課主幹）

文化施設の建設ラッシュに

小松 康夫

ここ数年、もしかしたら、いや、間違いなく、高知は『文化施設の建設ラッシュ』ということになりそうだ。

高知市の棧橋通り、高知南署に隣接して自由民権記念館が建設中で、昨今は、『お、なかなか良さそうだな』と思わせる『外観』が私たちの目を楽しませるようになった。岡豊の山では、歴史民俗資料館の建設が進んでおり、そしてまた、坂本龍馬を顕彰する記念館の計画もある。

『美術館の無い全国でも珍しい県・高知』として長い間肩身の狭い思いをしていた県民の前には、『高知県立美術館』の青写真が提示され、平成五年度中には開館することが決まった。

これで、懸案だった文化施設は、ほとんど出揃う格好となる。十数年前、ないないづくしの現状に、高知は一体どうなっているのだろうか？と腹立たしい思いに駆られたことなど、うそのような話である。

さて、この『文化施設のラッシュ』—その背景を考えると、どうしても避けて通れない存在は、県立郷土文化会館だ。



完成間近の高知市立自由民権記念館

この器が完成したのは、昭和四十四年。平成元年十一月には、開館二十周年をめでたくお祝いした郷土文化会館だが、この文化会館は本県の文化施設の一つの側面を端的に物語る施設だと言ってよさそうだ。

戦後すぐの高知市に、とある運動が誕生した。故・町田昌直氏らを中心とした県立美術館建設期成同盟会で、この運動は、故・中村博氏らの洋画家、日本画家らさまざまな作家を組み込んで大きく発展したが、もう一つ別の、いや、もつと多数の運動とぶつかる形となってしまう。結局、いくつかの運動をとりまとめて一つの施設に『収容』する—という形で登場したのが、この県立郷土文化会館である。

さて、そのいくつかの運動とは：無論、県立美術館構想であり、県の物産館構想であり、野中兼山を顕彰する施設であり、博物館的な意味合いを含んだ施設の建設計画もあったようだ。つまり、美術館建設計画が

打ち上げられると、『そんなら、おれたちの施設も』と各種施設の建設要求が相次いで登場したというわけである。

各団体がそれぞれの方法で県・行政当局に圧力をかけた結果—時の溝淵知事が『在任中唯一のぜいたく』と表現した郷土文化会館が高知城の足元に開館したわけだが、その裏側に、『各施設の建設要求を一つにまとめてやれ』という姿勢があったかどうか？。

それやこれやで、県立郷土文化会館は、大きく分けると、美術館と博物館（考古関係の史・資料の展示、収集、保管など）の二つの機能を併せ持ったものとならざるを得なかったのである。開館以来、二十年—この歳月の間、同館はある意味では立派にその二つの機能を果たして来たと言えよう。同時に、この二十年は、そこを利用する県民に、美術館なら美術館、博物館なら博物館としてのきちんとした単独の機能を持った施設が必要ではないか、ということをお教える『反面教師』としての役割を果たしたのである。

これが、平成三年度に開館予定の歴史民俗資料館、同五年度中に開館するはずの県立美術館の『青写真』が生まれる主要な原因になったのだと考えてもよさそうだ。

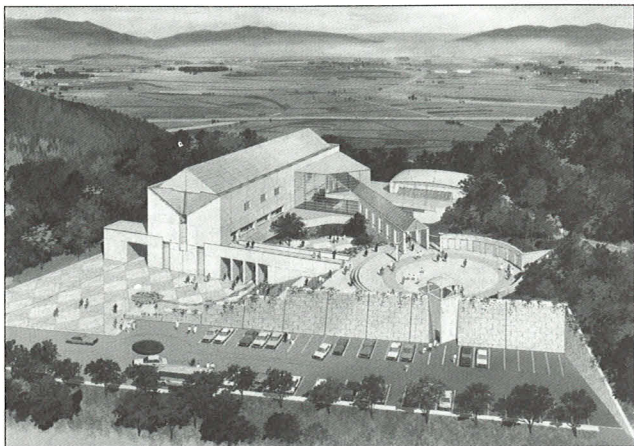
貧乏県と言っても差し障りのない高知県で、あの当時は確かに唯一のぜいたくだったはずの県立郷土文化会館。多少ともゆとりが出始め、高知市に限らず各地にいろいろな文化サークルが誕生し県民の『文化』への要求が高くなった昨今、個別の本格的な機能を追求めた文化施設への欲求が登場してもそれは当然だし、これがまた時代の流れというものかも知れぬのである。

とんどが片づいた—として手放して喜ぶことができるのだろうか。どうしても一抹の不安が残るのである。例えば、坂本龍馬や自由民権家らに関連した史・資料的な価値があると同時に、美術作品としても優れた絵画がどこから出て来た場合、その作品はどこに、どの施設に収められるべきか。

そしてまた、誕生した『器』を管理、運営するしつかりとした『人』の手当ては整っているかどうかの問題もある。

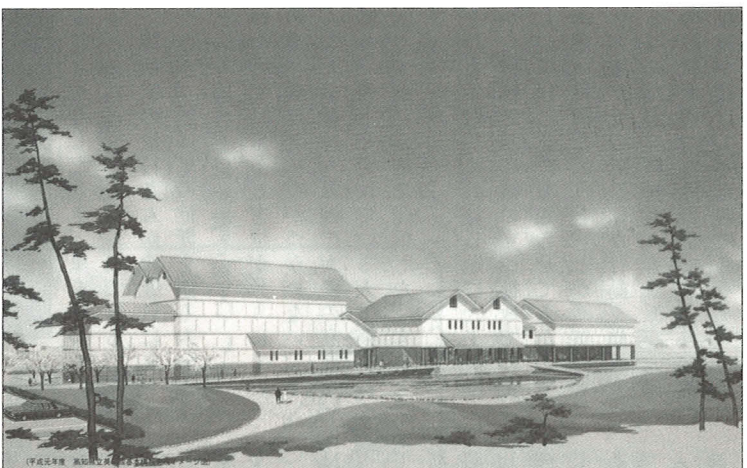
かつて、山口県立美術館を取材した時、同館の学芸課長は、

『美術館を計画する場合、まず、考えなければならぬ三つの要素があります。第一は、どのような施設をつくるかの（器）、開館の後、何十年かの歳月に耐えることができる優れた機能的なものを慎重に考えなければならぬ。第二には、（人）の問題。この人たちが館をどう運営してゆくか、どんな計画を立てて、どう県民の文化的な要望に添えていくか。そして、館として何をどう集めてゆくかという（物）の問題があります。一番望ましいのは、この三つの要素をしつかりと考慮に入れて同時進行的に計画を進



高知県立歴史民俗資料館の完成イメージ

めてゆくことでしょうか？』



高知県立美術館のイメージ案

県民が知らないうちに、いつの間にか先行。同時進行であるべきはずの『人』、つまりは専門職員、学芸員等の手充てはどうなっているのか。そして、その学芸員らが中心となって、収蔵品をどうするか、館を将来、どのように運営してゆくかを考えるべきだが、それは一体どうなっているのか？—どの不安なのである。ひよっとすると、現在の建設計画は、器の問題のみが『密室』の中で形式上でクリアされただけで、残る二つを未解決のまま船出したのかもしれない、という思いが、今、どうしてもぬぐいきれない。

つまり、私たち県民は、県立郷土文化会館が今後どうなるか—も含めてここ当分、現在進行している文化施設の建設計画を、もう一度チェックし直し、（器）に限らず（人）と（物）についてもどうなっているのか、しつかりと見つめてゆかなければならない、ということなのかもしれない。でないと、膨大な予算を投じて器だけは立派なものを作ったと後の世代から非難を受けなくても限らないのではないか？。

（高知新聞社会学芸部副部長）

冬の星

関 勉



冬空を代表するオリオン星座
(中央の太い星が三つ星)

私はふしぎに冬の星に縁があるようだ。第一、私が見つけた六つの彗星は、九月から二月までの、いわゆる冬場での発見であるし、また最近発見した多くの小惑星たちも、季節的には寒い時期に多い。それだけ冬は夏に比べて、星が美しく良く見える証拠でもある。

私が初めて覚えた星座はオリオンだった。もう半世紀も昔になるが、父の出身地である米田に連れて行ってもらった帰り、夜更けた畦道で指さし教えてもらった「三つ星」の美しさは未だ忘れることができない。当時は街も小さく、ネオンやイルミネーションも少なかったので、高知市の空に輝く星たちも凄絶なまでに冴え渡っていたのである。

明治三十年生まれの父は、よくハ

レー彗星の話をしてくれた。そして昔の人は、今の人に比べて遙かに星に関心を持っていたと云う。なぜなら、昔は太陽や月の出没によって生活していたし、星によって方角や時刻を知ることが多かった。また毎年ある明るい星が昇ってくることによって農作の時期を知ったし、古くはナイル川の氾濫が赤い星の出現によって予知されたと云う。またホウキ星の出現は災厄を予言するものと云う見方もあったが、このように天体現象が、直接人間の生活に関係していたため、人は星座に詳しくならざるを得なかったのである。

面白いことに私は今でも太陽や月、星によって方角や時刻を教えられている。住み馴れた都会ならいざ知らず、野山を歩いたり、知らない土地

を旅したりしたとき、星を知っていると意外と役に立つものである。

探検家の植村さんが北極点に立ったとき、彼は星の位置を測る六分儀という器具と無線機を携えていた。極の近くに来ると方位が分りにくいたので、真の北極点が見つからない。そんなとき彼は六分儀で太陽の高度を測り、頭上を飛んでいる人工衛星に向かって測定結果を発信した。するとアメリカの Smithsonian 天文台が、それを受信して計算し逆に人工衛星から植村さんに彼の立つ極地での正しい東経と北緯を知らせてきたのである。冒険と云うと、とかく気力と体力まかせの無鉄砲な行動を想像するものだが、植村さんも立派な天測の器械を使って地の果てまで科学的な旅を続けていたのである。

余談はさておき、もう一度本題である「冬の星」に帰ろう。夜半ともなれば南天にあのオリオンの三つ星が行儀よく並び、天頂にはおなじみの「スバル星」が光っている。六つから成る小さな星団で、まるでホタル籠を眺めるように可憐な姿である。夜の更けるころ、東南の空に現われる大犬座のシリウスは全天で一番明るい星である。

今年の冬は特に期待している星がある。それは母の星が帰って来るのである。実は五年前の冬、母の亡くなった晩、偶然にも発見した一つの小惑星があった。私はその星に母の名をとって「としえ」と名付けることにした。しかし学会で認められる前に不幸にも行方不明となってしまったのである。

かに座に輝いているはずの母の星は、この一月、五年振りに地球に近づいてくる。思えば幼い頃から病弱で臆病者で、そして不幸の多かった私を励まし育ててくれた母。天体観測の理解者だった母への最後の恩返しだと思っ、今年の冬は母の星の再発見にがんばりたいと思っている。それが一九九〇年新春の私の夢でもある。

(天文研究家)

私の風景

西村 和子



魚の棚は、高知で一番小さい町。三百数十年、市民の台所として、愛され親しまれている。街の中心にありながら、昔ながらのたたずまい、人情の細やかなところなど、下町の情緒いっぱいである。

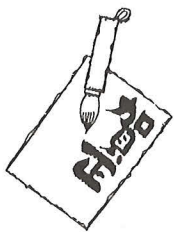
魚の棚

昔ながらの伝統と思われているものも、実はそれほど古いものではない場合がある。郵政省のご入力で、ますます盛んになっていく年賀状だが、取扱開始は明治二十二年のごとで、古来からのしきたりではない。

それもはじめは、年が明けて文字どおり年頭の所感を書いて出していたものが、最近では元日に着くようになると、年末に書くことが多くなっている。郵政省も年末の何日までに出してくれれば、元日に配達すると宣伝している。

現代風俗を考える〈5〉

年賀状



そこで暮れの忙しいさかりに「謹賀新年」とか「謹んで新年のお祝詞を申しあげます」などと書いて出すのである。そうぞらしいといったらありはしないが、そういう習慣ができてしまつとそれに従わない方が、つむじまがりになってしまつ。習慣とはおそろしいものである。そして知らず知らずのうちに、近代システムのしかけに操られているのだ。

年賀状の役割は、年頭の挨拶だけで

なく、普段無沙汰になっている友人知人への、年に一度の便りなどいろいろの目的があるうから、それはそれでいいのだが、ひとあし早い年頭のあいさつを、お互いにそのときのものとして読むといつのは、よくよく考えてみると形式優先ではないか。このより形が先というものだ。それでも「こころも形も」といっただつたらまだいいのだが、あのすさまじい初詣での様子を見ていると、信仰とはなにかをほんとうに考えたくなる。今年もおそらく全国で八千数百万人の人たちが、何処かの神社、仏閣に初参り行くことだろう。そのなかの大多数は、普段は殆ど宗教心など持たない人たちである。

だれが何を拝もうと自分の勝手だと言えはそれまでだが、信仰とはもつと敬虔なものではなからうか。形だけが先にひとりあるきしていく現代の風潮は、なにか空おそろしくなる。新年が「かたち」優先の初参りではじまるのでは、年の初めから「こころ」がおき忘れられてしまつ。

二五〇号を累ねて

杉本 恒星

俳誌「壺」の年齢は二〇年になる。欠号もなく二五〇号を累ねた感慨をいま噛み締めている。

「壺」は、現代俳句として、土佐で生まれ且つ育つ者が、その風土性と個性的に格闘した土着の詩韻をはぐくみたいとの、多少の思い上りから創刊された。

秋日濃し光をとぎすお婉堂 弥生は、野中一族の運命の暗示、死んでゆく髪に触れしか崖椿 恵子は、足摺の絶壁から身を投じた者への哀吟

彼岸花髪は女を翻弄す 千鶴は、まさに土佐女の情と怨の詩 勿論まだ未熟である。



九月号

1989-250号記念特集

SRSの会

ユニークなサロン

脇丸 京一

個人の尊厳と人権が未だ確立されず、迷信と不合理な考えが横行していた十七世紀ヨーロッパに起きた、



SRS 土佐吉田会学術講演会

理性に基づく事象の正しい認識を標榜した啓蒙思潮は百科全書に結実し、これがフランス革命の思想的役割を果たした。二十世紀の今日依然として封建思想の残存による個人の尊厳の未確立、人種差別及び思想の違いによる人権弾圧が世界の各所で行われている。また、科学の著しい発展にも関わらず、一方では非科学的な考えが広範に存在している。

一九八七年に創設されたサロンであるSRSのSは科学的世界観、Rは人権、Sは核兵器産業の平和産業への転換と軍産複合体の解散を意味する。修辭的にはSouthern Red Starsであり、二十一世紀の新啓蒙思潮を志向する。

SRSは例会において、会員または会員外の人がある専門について講演し相互に啓発する。現在まで例会数一三、講演数二三である。特別講演として、山岡亮一高知大名督教授の「土佐の文化論」、木原正雄京大名督教授の「軍縮の経済」、学士院賞受賞者の益川敏英京大教授の

高知コンサートグループ

四半世紀を来て

甲藤 卓雄

昭和三十九年五月、創立当初は二十名足らずで発足しました。故町田昌直先生を会長に、竹村勲、向原寛尚氏を中心に「高知の音楽界の流れを変えよう」と血気盛んでした。

以来、地道な活動ながら年一回以上の定期演奏会や学校総見の音楽教室、地方公演など回を重ねて来ました。

このグループの特色は、ピアノ、声楽、管弦楽はいうに及ばず、作曲、邦楽までを含む多部門で構成され「演奏を通じてお互いの向上と親睦を深める」を旗印に、地方音楽界にあり勝ちなセクショナルリズムとは無縁の立場を守り続けて来ました。趣旨に賛同する者は、学歴や年齢に関係なく手続きを踏めば入会出来ます。

昭和五十八年、創立二十周年を機に執行部を一新、マンネリ化の排除、質の向上、徹底的な合議性による民主的な運営と連帯意識の強化に取り組みで来ました。平成元年十月、高知市制百周年を祝し、創立二十五周年の記念のグラントコンサートを開催、安芸及び幡多両支部でもこれに呼応し、九十八名の現会員がごぞって参加しました。



内山時江モダンバレエ研究所

オリジナルな作品創りを

内山 時江

一九四九年石井漢の舞踊を習う(広島)。一九五三年高知にモダンバレエ支部開設。一九六〇年時江独立。一九六五年世界青年平和友好祭(ソ連)作品「阿修羅」を発表。一九七一年ニューヨーク研修。一九七九年パリ研修。その他、研修及び作品発表で五度欧米へ。国内では一九七三年より現代舞踊協会主催の新鋭中堅舞踊家による現代舞踊公演で作品発表、自主公演三回、コンクール入賞一回、文化庁推薦公演二回、評論家推薦公演一回(何れも東京)。高知市ではモダンバレエ開設後定期公演三七回、内山時江モダンシアターは一五周年を迎える。現在、東京と高知で指導及び研修が続いている。

今年十月には一九九〇年芸術祭参加作品を東京で発表する。主な作品は①みさき②オルフェの鏡③二つの海④海からの風のように⑤私のイサドラ⑥テール⑦かもめ⑧死の寓話。研究所公演での主な作品①星の王子さま②メリーポピンズ③ピーターパン④ノートルグムのせむし男⑤鶴になったアイヌの話⑥北きつね⑦かるがもの行進⑧クモと昆虫 私のささやかな誇りはオリジナルな作



堀詰電停から南へ約50メートル。元堀詰座跡の木立の中に土佐の生んだ歌舞伎役者「実川八百五郎」の胸像がある。舞台生活90余年、主として土佐歌舞伎・共正会にあって、座とともに西国一円を興行、土佐歌舞伎最後の役者として知られた。

「壺」はこれからである。いま百人の可能性がひしめき、百人の後続が励んでいる。「壺」創業の悲願は、やがてこの人達によって叶えられるであろう。惜しむらくは、男性の中に「東洋の真珠」を愛する人が少ない。土佐の俳句革新は女性の手によって成されるかと思われる。

「宇宙の発生と素粒子」がある。また吉川安子・宮内康恵氏のヴァイオリン、大野日菜氏のピアノ・ミニコンサートが二回あった。現在の会員数は一四〇名、岡林清水会長、桐山卓美事務局長、戸梶賢・竹村真紀監事の他、十七名の役員がいる。中村錡一郎他二名の方に顧問になって頂いている。

年を記念のグラントコンサートを開催、安芸及び幡多両支部でもこれに呼応し、九十八名の現会員がごぞって参加しました。今一つの重要な事業の「高知県新人演奏会」も、昭和五十二年の第一回以来、毎春、音大を卒業した県出身者達を郷土ファンで紹介し続けて今年で十三回となりました。

品創りである。年に一度は海外で研修するがその度に地方文化の根強さを痛感させられる。私達のバレエも世界の普遍性と一方では風土性を統合したものが求められている。初期の生徒達の中には現在活躍している門下生もおりそれぞれ舞踊界で成果を上げている。こうした活力が現在の児童部の子供達の目標となり、未来の良舞踊活動につながることを希望している。

風伯

私の吉村冬彦賞

「先生、大岡が参りました。」作家大岡昇平が野上弥生子に捧げた甲辞の冒頭の言葉だ。どのような名言・名文でも綴れたであろうところに、あえてこの言葉で始めたことに万感の思いを託したことが胸に伝わって来る。この「万感の思い」中には、大岡が晩年終

の栖として定めた成城という、その同じ土地でこれまた一生の幕を引いた野上に対する絆とでもいう情感があったことは確かだ。

我々土佐人は、この絆のような感性の活用が下手だ。先日、市制百周年の事業として松山市が「坊ちゃん文学賞」を発表したことを

聞いて、このことを改めて思った。もちろん「坊ちゃん」ほどピュアでこそないが、夏目漱石門下の吉村冬彦を、土佐として何とか生かしたいの思いがずっと以前から私にはある。

県文協協会の寺田寅彦記念賞があると言われるかも知れないが、この対象は研究報告が主体で、わずかに「自然科学を対象とした随筆」が含まれているに過ぎない。これでは寺田寅彦はあっても吉村冬彦は見えて来ない。

そこで、私の「吉村冬彦賞」。まず第一に文筆関係以外の本業を持っている人の随筆であること。次に随筆はテーマにより一編だけなら実力以上のものになることもあるので、最低十編以上の作品群が対象であることが条件である。

この原稿を書き終わって、まず私のすることとはこの十年ほどで、あちこちに書き散らした雑文を探し出すこと。そして、じつと時を待つのです。(南北)

賛助会員募集中!!

会費 年2,000円 (前納)

特典 ① 機関誌文化高知を年6回お手元にお届けします。

② 事業団発行の出版物の10%割引 (一部例外あり)

③ 主催事業や刊行物の案内

※ 上記特典は、申し込みいただいた日から1ヵ年有効です。

申し込み ①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

高知を撮る

第6回高知の映像コンテスト

〈テーマ〉 高知

記録性を持った古い写真から現代のものまで可。

〈応募要領〉

◎応募資格は、撮影者または著作権保持者に限る。

◎作品は4ツ切以上、発泡スチロールパネル貼りとする。組写真は3枚組までとする。

(ただし、古い写真はこの限りにあらず)

◎作品一枚ごとに、裏面に応募票を貼りつけること。

〈賞〉特選2点・準特選15点・入選100点(特選・準特選については原簿・著作権は主催者に属するものとする。)

〈受付〉1月10日(水)～2月20日(火)。

郵送の場合20日必着。

〈入賞作品展〉 3月中旬

作品募集

くわしくは事業団まで

TEL 73-4365

出版のご案内

土佐自由民権資料集

外崎光広編

定価三〇九〇円

土佐自由民権の基本的資料を事件別に分類・収録し、原資料により各々の事件の実態が把握できるように編集した資料集。原典により民権を知ることが出来る。

・高知レポート3

土佐の自由民権運動

外崎光広著

定価一〇三〇円

従来の自由民権研究に一石を投じる画期的な著作。土佐人必読の一冊。

付方言土佐日記全訳注

土佐日記

土居重俊著

定価一八〇〇円

市制一〇〇周年記念出版

図録高知市史

高知市文化振興事業団編集

定価二五〇〇円

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL (〇八八八) ⑦四三六五

郵便振替 徳島8-14869